

最優秀賞

性別をこえた平等へ

北海道教育大学附属旭川中学校3年

おおくし ゆか
大串 雪花



ある日の学校の授業のことでした。1人の先生が男子生徒に言いました。

「おい、何でヘアピンなんてつけているんだ。みっともない。自覚はあるのか。」

私の学校には校則があります。ヘアピンは目立たない色、という指定があります。言われた男子生徒は、校則に違反していない黒いヘアピンで前髪をとめていました。

「えっ」その男子生徒は驚いて目を大きく開き、あわててヘアピンをはずしました。私はその出来事を見て「あれ。校則に違反していないのに何で注意されたの。」と、思いました。黒いヘアピンで髪をとめている人はたくさんいます。女子がヘアピンをつけていても何も注意をしません。その人が男子、というだけで、一方的に非難をしたのです。私の中に、納得のいかない気持ちが膨らんでいきました。

最近、ジェンダーレスという言葉をよく聞きます。テレビや新聞などの、マスメディアでもよく取り上げられ、ジェンダー平等を達成することは、とても大切なことだ、と授業でも習います。先生が矛盾したことを言っていると感じ、「なぜ、彼がヘアピンをつけたらだめなのですか。」と、注意した先生に、尋ねようと何度も思いましたが、その言葉は結局口にすることはできませんでした。

次の休み時間に、私は複数の友人とその話をしました。私が疑問に思ったことを伝えました。同調してくれた友人もいましたが、多くの友人は「でも、男子がヘアピンは変だよな。」とか「そこまで深刻に考えなくてもいいんじゃないの。」という反応でした。

大人はどのようにこの出来事を受け止めるのか、気になったので、母に学校での出来事を聞いてもらい、自分の思っていることを相談してみました。そうすると、母は不思議そうに、

「その先生は悪気があったわけじゃなくて、

男子トイレは青、女子トイレは赤、みたいなずっと備わってきた感覚で言ってしまったのではないかな。」

その言葉を聞いて、私は腑に落ちました。発言をした先生も今までずっと培われてきた感覚で、男子がヘアピンをつけることに、違和感を覚えて指摘してしまったのではないかと思いました。

私は小さな頃からとても活発で、人見知りをもっ

たくしない子供でした。女の子は、母親の後ろに隠れて恥ずかしがるイメージが大半なのか、

「女の子なのに、とても元気だね。」

とよく言われました。幼いころからずっと言われてきた言葉なので、今まで特に違和感がありませんでした。しかし、私は、学校での出来事から、「女の子らしい」「男の子らしい」を疑問に思うようになりました。そして、無意識のうちに使ってしまうそのような言葉で、私が誰かを傷つけてしまわないように、意識を改める事にしました。

私のこの思いを、自分だけで完結させてはいけません。そんな強い思いが生まれ、私はジェンダー平等について思ったことを素直に友人に伝えてみることにしました。また、男女の枠にはめて発言した友人に、「それはどうなのかな。別の視点から考えてみよう。」と一緒に意識を変えていけるように行動してみました。最初は戸惑い、「そこまで考えなくても……」と言っていた友人達でしたが、徐々に、「考えてもみなかった。確かにそうかもしれない。気をつけて生活してみるよ。」と前向きに考え、一緒に行動する人が増えていきました。実際に、自分から積極的に行動してみることによって、周りの意識を変えていける、と私は実感しました。

「ピンクが好きです。」

「将来はサッカー選手になりたい。」

「好きな遊びはおままごとです。」

みなさんは、これらのセリフからどちらの性別の人を思い浮かべましたか。

日常に定着している、性別に対するイメージを変えていくのは時間がかかるでしょう。

しかし、そのイメージだけで言動をすると、つらい思いをしたり、嫌な気持ちになる人がいるかもしれません。

このようなことを防ぐためにも、性別の違いに囚われず、その人自身を尊重する言動や行動を常に意識していきます。ジェンダー平等とはまさに、性別をこえて1人1人の「個性」を大切にすることなのではないでしょうか。「私が、積極的に行動をおこし、周りの人たちと一緒に意識を変えていきます。そして、共にジェンダー平等を達成しましょう。」